

日本語母音音感の統計的研究

西原, 忠毅
九州大学教養部

<https://doi.org/10.15017/6796092>

出版情報 : 言語科学. 1, pp.13-28, 1965-03-05. 九州大学教養部言語研究会
バージョン :
権利関係 :



日本語母音音感の統計的研究

西原忠毅

音質 (sound quality) とか音価 (sound value) というのは一般に機能単位として相互に区別される音素 (phoneme) の個性をいう。それは実際には感覚的に個々の音素がよって以って認識されるところの性質である。

さらに詳しく言うならば感覚器官に与えられる刺激そのものは一つ一つ異っていて、同一音素の音でも厳密に言えば二度と同じ音波を形成しないはずであるが、感覚器官を通じて主観に認識されたものは、与えられたままの千差万別の様態ではない。というのは、認識には主観の判断が加わるので、感覚への所与が未整理のまま認識されるのではなくて、ある程度類別された形でカテゴリカルに認識されるからである。語音に対するそうした類別の機能的な枠組がいわゆる音素体系である。すなわち音素とは語音の認知に必要な最少限の区別なのである。だからどんなに目の荒い人でも音素体系の網だけは用意している。

しかしわれわれは音素よりもさらに小さい語音の区別をも認識し得る。それを音素内の異音 (allophone) という。異音は基本音一個のこともあり、数個のこともある。いずれにしても音素内で定位置を占めていて、これとても音素のもひとつ下位の類別に他ならない。ところが現実のスピーチにおいては、人により、同一人の場合も時所によってさらに異音の布目をも洩れるような細かいニュアンスの音が発せられるのが実状である。けれどもそういう細かい区別は意味の最小単位である語の形成上の個性からいえば、必要不可欠の存在ではない。異音的複合体としての語音が最終的に必要とするものはせいぜいのところ音素である。

音素の組合せによってできた語音の個性が特殊な意味の符牒となって語は成立する。ところが語は具象物としては音であるところから、意味を離れて音そのものが与える感覚的所与というものを考えることができる。その感覚的所与に対するわれわれの直接的反応を音感と呼ぶことにする。

音感とは意味に関係しない語の形式面のみが惹き起す現象と言える。これを語に戻して意味と交渉せしめるとき音感とは語感の形成にあずかる一つの有力な属性になりうることが分る。音感論はだから語感論において総合さるべき予備的段階にあるものと言うこともできる。

さて語音音感の調査は、語音を全体として見るのと、語音の要素としての単音を見るのとの

二つに分けられる。この調査は後者で、母音音質の音感を日本語について、統計的に探り出そうとするものである。結果を見る前にこういう素朴な統計方法における音感なるものの性格をすこし説明し、この単純なものにさえも伴う困難を述べて置かねばならない。

(1)音感とは上述のようなものであるから、主観の状況によってある程度異なる。一定の音に対して同一人が何かを感じるにしても年齢によって差を生じるかも知れないし、その人の周囲の状況の相違も同じ結果を招くだろう。ともかく内部環境に変化が起きれば、同一の感覚的所与に対して異った反応を起すのが常である。場合によってあるいは大きく、あるいは少しく異なるであろう。それかといって所与と反応の間に何か必然的な関連性が予想されなくては、始めから音感論は成り立たない。

(2)ところがスピーチにおいては、無意味な単音が切離されることは、特殊な場合しかないのであって、通常個々の音は音素の連続体である語音の一環であり、語音はさらに語の有機的集積たる文の一部として話される。従って実際に発せられるある音の音感というのは語や文という具体的なものの支配を受け、それから切離しては考えられないものである。いろいろの制約により規制されていて、同一の音が時によって皆違いうわけである。語を離れ文と別れた「あいうえお」の音感というのはだから抽象というべきである。もちろんこういう抽象的な基礎の調査は、具体的なものの解明に役立つしむる意味においてなされているのであるが、これをそのままの形で具体的なものに当てがうことは警戒を要する。実際のもは複雑な与件が加わっているので、ヴァリエティーを生じて、音感は複雑化する。すなわち「あいうえお」の音感という場合には、それが文中にあっての音の高さ、強さ、長さ、音色等に関係がなく、ただ標準的な五つの単音の音色差が呼び起す主観的反応に止まる。

(3)先に語音の感覚的所与と言ったが、語音は第一には聴覚的存在である。聴かれるものである。同時に話されるものである。現在の話者が話しているものであるほかに、現在の聴者が話し得るものである。すなわち話者としての体験と資格をもって聞くものである。また話者の立場からは、これと逆のことが言える。そのようなわけで、語音は聴覚的存在であると同時に発声感覚上の存在でもある。(呼吸圧から喉頭を経て唇に至るまでの運動感覚が関与する。)だがそれだけの意味で音感と言ったのではない。さらに内部的に他の感覚との繋がりがあって、反応は複雑化する。音が黄色だったり、とげとげしていたり、暗かったり、鈍かったり——体感的な併発現象、すなわち共感覚 (synaesthesia) なるものが起きる。これについては、五官の分化発達には生物の進化に伴ったもので、未発達段階では感覚は一つであったという進化論的な説明がなされている。これには生理学的心理学的方面からする解釈もまた可能であろう。いずれにしても、刺激がつづく直接の感覚的所与だけがあるのではなく、

内部感覚が呼び起され、知覚も連坐し、時には情緒的なものまで手繰り寄せられる。音感とはそういった一連の反応の総和なのである。

(4)以上のような主観色の濃いものが音感だとすると、音感には当然個人差が考えられる。Jean Arthur Rimbaud の ‘Voyelles’ という詩の一節に、A noir, E blanc, I rouge, U vert, O bleu, voyelles, Je dirai quelque jour vos naissances latentes とあるが、人が皆これと同じ感じを持つとは限るまい。といっても人それぞれの音感に全然一致点がないとすれば、音感に関するかぎりお互いの理解は不可能なわけである。

心理型には極端に偏向したものがあるが、そういう人は割と少く、大多数の者は普通の型に属する。天才は応々にして極端な型なものだから、その点からしても天才の作品は凡人に理解が困難となるのである。Rimbaud が前記の詩で、少くとも自己にとって真実なものを表現したとすれば、彼の音感の一部には多少アブノーマルなものがあるのではあるまいか。感覚上の極端な型の人ばかりきわめて個性的で、共感覚の異常に強い人があるが、常人は感覚間の分離がよくて、相互に一致点が多いと言えるであろう。この点は統計の処理に当って十分考慮すべき問題である。というのは統計では各項目は量として表われるので、少数者たる質的異分子は応々にして無視される危険があるからである。必ずしも多数が正しくて少数は統計上の誤りだと言ってしまえないところに難かしさがある。

(5)今音感の個人差ということを行ったが、言語あるいは方言の違いも音感の問題を複雑にする一つの素因となる。言語あるいは方言はそれ独自の音素組織や特有の音色を持っているので、またそれ以外の言語環境からしても、類似音がその所属する言語によってかなり違った音感を持つと思われる。前掲の Rimbaud の詩を英訳して、A, black; E, white; I, red; O, blue; U, green と行ったのでは共感者はますます少くなるであろう。それにしても人間の精神作用が相似している限りにおいて、根本的には個々の言語を超越する共通の感じ方があるにほしないかと思われる。Henry Bradley や Otto Jespersen などそのようなことを言っているし、言語心理学や音響物理学上の研究もそういうことを実証している。その証左の一つとして言語現象においては、擬声語の世界的な類似という事実がある。

筆者は実は英語の音に対する日本の学生の音感を調査する目的で、そのついでに日本語の五母音についての音感の調査を行ったのである。ところが日本の一般の大学生は遺憾ながらそういう調査の材料として適当なまで英語に習熟していないことが分った。英語の音を日本語の類似音と混同したり、日本語の音による連想を代替することが推測されたので、日本語の母音に対する回答の方だけを信頼に値するものとして処理せざるを得ない皮肉な結果とな

った。

ところで筆者が行った統計法はその道の専門的知識と技能を欠いているので、至って粗笨で初歩的なものとなり、あるいは専門家の憫笑を買うことを怖れるものである。

不正確な点の一つを言えば、このような統計が成立する基礎条件として先ず第一に被験者が自分の感じをありの儘に、善意にも悪意にも誤りなく回答することが肝要であるが、その点において信頼できない回答が相当数あるのではないかと推測される節がある。とくに一応の注意はしていても、共感覚の稀薄な者が無理に回答することによって結果の精確度を減じているのではないかと思われる。また極少数ではあるが不真面目な回答もないではない。しかしこのようなことについて処理者の推定で結果を取捨することは、一つの予測的解釈を押しあてがう危険があるから、一切手を触れずに計算の中に入れた。また「あいうえお」の聴覚的・発音感覚的な感じを回答するように被験者に注文をつけたが、回答用紙の記入欄の右側に平仮名で「あいうえお」と書いて置いたので、平仮名の視覚印象が全然介入しなかったということは保証できない。

さらにまた、どんな評語を用いてもよろしいと指示していても、予めいくつかの評語の見本を与えて置いたので、それらが比較的多く用いられたであろうことも推測に難くない。結果を読むに際しては以上のようなことを念頭に置く必要がある。

a. 聴 覚 数字は回答者数、()内の数字は被験者全員に対する回答者のパーセンテージ、}印は加算、]印は減算を現わす。以下の表においても同じ。

	あ	い	う	え	お
高 い	58	109	9	30	11
やや高 い	2 } 60 } 28 (9)	1 } 110 } 91 (30)		1 } 31	
低 い	32	19	109 } 100 (33)	37 } 6	120 } 121 } 110 (37)
やや低 い					
強 い	54 } 22 (7)	63 } 52 (17)	17 } 36 (12)	21 } 20 (7)	89 } 68 (23)
弱 い	32	11	53	41	21
澄 ん だ	38 } 31 (10)	80 } 79 (26)	9 } 35 (12)	33 } 16 (5)	2 } 17 (6)
濁 っ た	7	1	44	16 } 17	19
やや濁った				1	
中	8	1	5	4	2
混 っ た				1	1
計	231	285	246	185	266

〔被験者 299 名。 1 音について評語は 1～2, 対照する矛盾概念についてはどちらか一方だけ記入のこと。〕

言葉は聴覚によって受取られるものであるから、言葉と聴覚との関係は直接の関係である。比喩的な意味でなくて音としての高低, 強弱の感がある。最後の項目の澄濁については異論があると思うが、音の直接の感覚として取扱った。「中」以下は被験者が勝手に選んだ評語である。

この表によって見ると、**あ**の音を「高い」部類に入れたもの 60 名, 「低い」と言った者 32 名, 「高い」と「低い」は正反対なので、この解釈は数字通りに本当に「高い」と感じるものが 60 名 いるのに対して、本当に「低い」と思う者がその約半数の 32 名 いると解するか、**あ**の音では高低いずれとも判じ難いと取るかであろう。もし前者が真実ならば、両者の差 28 名, すなわち被験者全員の 9% という数が意味を持ってくる。9% というのは大した数ではないが——。

強弱関係についても略同様のことが言える。その差は強の優位 22 名, すなわち 7%, 澄濁は 38:7 で、差は澄の + 31 名 (10%)。どっちつかずの音だとしている者が 8 名 いるところからしても、**あ**は「高くて、強い、澄んだ」音であると断定するわけには行かない。とくに「低い」と「弱い」のそれぞれ 32 名は全部を錯誤として消し去るには大きすぎる数字だからである。

い音ははっきりと「高い」, 「澄んだ」感じの「かなり強い」音だと言えよう。**い**のフォルマント構成で**い**を特色づけている高い振動数がそれを裏付けている。とくに澄:濁=80名:1名では澄の優位は絶対に近い。

うは低い音で、「いくぶん弱く、濁った」感じがすると言えよう。

えは高低関係ではいずれとも言えないが、「やや弱い、澄んだ」音だと言えるかどうか、回答者が他の四音に比して著しく少いことから、大部分の者にとっては明確な評語を当てがいがたい音らしい。

おは「低い」音で「強い」とも言えるし、「やや濁って」もいる。**う**に似ているが、**う**が「いくぶん弱い音」と評されるのに対して、これは実数 68 名 (23%) の優位をもって「強い」音と言える。もっとも実数 21 名の「弱い」方の加担者を全く無視するわけには行くまいが。

明暗と色彩とは視覚的なものであるから、音からすれば間接的に連想される共感覚である。視聴二感覚は五官の中最も高等なもので、両者はよく分化しているため他の感覚よりもはっきりした対応的な繋りがあるようである。

b. 明 暗

	あ	い	う	え	お
至極明るい		7			
明るい	160	147	14	68	23
薄明るい	4 } 164 (55) } 129 (43)	3 } 157 (52) } 121 (40)	3 } 17 (6)	6 } 75 (29) } 16 (5)	1 } 24 (8)
中位	1			1	1
薄暗い	25	26	85	42	36
暗い	10 } 35 (12)	10 } 36 (12)	82 } 167 (56) } 150 (50)	17 } 59 (20)	156 } 192 (64) } 168 (59)
計	200	193	184	134	217

〔被験者 299 名。評語は1音につき1に限る。〕

先ず明暗について見ると、**あ**は明：暗＝164：35で、明るい方が遙かに優勢であるが、日本語には「明るい」「暁」「曙」「開ける」「赤」等あ音を頭音に持った一連の明るい感じの語があるので、その方の連想の牽引力をいくぶん割引して見ねばなるまい。「明るい」に反対する者の35名（12%）は無視できないように思う。その中25名が「暗い」でなくて「薄暗い」と回答したことも注意を要する。**あ**の音はいよりも後方で、且つ「開いて」発音される音なので、そういう答が出るのかも知れない。標準英語の〔a:〕のごときは後母音に属していて、確かに「やや暗い」音である。

い音の統計結果は**あ**によく似ている。唯**あ**になかった「至極明るい」とか「まぶしい」とか「強烈に明るい」といった種類の評語が**い**には合わせて7あることが**あ**と違いたいの明度を物語っている。暗い方に出た36名（12%）はどう解釈したらよいか見当がつかない。過誤と見てしまうには大きすぎる数である。

うは「薄暗い」と「暗い」と合せて167名（56%）、「明るい」「薄明るい」がその約10分の1しかないのだから、「暗い」方の音と言ってよかろう。もっとも「薄暗い」と「暗い」が略同数なので「真暗い」感じの音でないことは確かだ。

えは聴覚の場合と同様回答者数が最も少く、75名：59名の比で明暗両域に跨がり、「明」の方にやや歩がある程度。

おは「暗い」音と言って差支えなからう。それもうと違って「薄暗い」：「暗い」の比は36名：156名だから、圧倒的な数で「暗い」音の方が優勢である。

英語の場合〔ɔ〕と〔u〕は〔u〕の方が **darker**、あるいは **duller** と言われるが、日本語の**う**は英語の〔u〕よりも調音点がかなり前方に寄っていて、唇の丸めがなく、日本語の

おは調音点が英語の [ɔ] = [ɒ] より上位（調音点における舌の位置と硬口蓋との開きが狭い）であるから、明暗の関係が反対になるのであろう。

c. 色彩

	あ	い	う	え	お
赤	87	8	1	2	1
暗 赤	2				
真 紅		1		1	
紅	93 (31)	10	3	1 } 6	1 } 2
鮮 赤					
朱	1	1	1		
桃 色	3		1	2	
橙	29(10)	6	7	19(6)	9
黄	7	69(23)	16(5)	25(8)	5
黄 緑			2	2	
緑	9	6	6	12(4)	3
明 色	1				
黄 土 色			1	1	
褐	3		18(6)	16(5)	9
赤 褐				2	
淡青(空色)	2	4	3	2	1
青	12 } 14(5)	25 } 29(10)	10 } 13(4)	10 } 12(4)	8 } 9
藍(紺)	3	9	4	2	5
紫	2	4	2	9	3
白	4	29(10)	1	3	8
透 明		1		1	
灰	3	6	62(21)	15(5)	21(7)
鉛 色			1		
黒		4	10(3)		79(26)
計	168	173	146	125	153

〔被験者 299名〕

白灰黒の系列は科学的には明暗の範疇に入れられるが、常識的な慣習に従って色彩の中に

入れてみた。

あは赤の部類に属せしめる者が93名(31%)で断然多い。次は橙の29名(9%),次が青系の14名(5%)である。赤が多いのはあと「あか」の第一音および第二音の母音との一致がある程度の作用を持っているのではなからうか。また「あお」についてもいづらかそのようなことが言えよう。この点についての統計の結果とその解釈は兼常・宮内両氏と私はほとんど一致している。

いは黄が69名(23%),次で白の29名(10%)と青系のやはり29名(10%)である。黄といい、白といい、色彩の中では最も反射光の多量な目立つ色である。それとは反対に近い青系がどうして29名もあるのだろうか。兼常・宮内両氏はいに「冷い青」を予期して調査された結果は「黄」がとびきり多く青は少かったことになっているが、私の統計結果では青系と白はそれぞれ黄の4割強に当る。私は青系がこれだけの数に上ったことをむしろ不思議に思うくらいである。やはり「澄んだ青」や「冷い青」との連想があったのだろうか。

うは「灰」色というのが62名(21%)で最も多く、他はずっと下って「褐」の18名(6%),「黄」の16名(5%),「青系」の13名(4%),黒の10名(3%)となっている。兼常・宮内両氏はうはえと共に複雑な音と言っておられる。その傾向はこのような結果からも幾分認められるが、総合的に見て私はずをえほどに捕捉し難い音感を持つとは考えない。日本語のうがいくらかいに接近した調音点を持つことが黄の5%の原因となっているのかも知れないが、大勢は暗色の方にあると言ってよからう。

えは例によって回答者が少く、低調に散らばっていて、色感性に乏しいことを示している。「黄」の25名(8%),「橙」の19名(6%),「褐」の16名(5%),「灰」の15名(5%),「青系」の12名(4%)。あといとうの特性を少しずつ持っていると言おうか、あるいは際立った特色がないと評すべきであろうか。

おは「黒」が79名(26%),「灰」が21名(7%)で、明暗の場合におけるうとおの関係に似て、「黒」に賛同する者の数がうよりも遙に多い。兼常・宮内両氏の報告ではお、とくにローマ字で書かれた場合の'o'に「白」がかなりあった由であるが、私の統計では「白」は実数8名に過ぎない。

d. 味 覚

	あ	い	う	え	お
甘 い	82 } 1 } 83 (28)	15 } 1 } 16 (5)	15 } 3 } 19 (6)	24(8)	15(6)
うす甘い					
うまい					
辛 い	1	22(7)	3	12	2
ぴりっとする					
酸 い	2	47(16)	7	10(3)	1
甘酸 い			2	2	
苦 い	3	10(3)	11(4)	15(5)	11(4)
甘苦 い				1	1
渋 い		1	1	2	2
えぐ い				1	
すずしい		2			
計	89	100	43	67	32

〔被験者 299名〕

味覚は音に対しては間接的に結びつく感覚である。味覚全般にわたって回答者が少ないことが、母音の聴覚と味覚との連合が悪いことを物語っている。比較的的回答者の多いあといは、前者が甘さと結びつき、後者が「酸い」味を中心に刺戟性の強い味と連合すると言えるようであるが、評語の「甘い」は第一音の一致からいづらか言葉に釣られてはいはしないだろうか。

うとおは回答者が少ない上に、分散していて特定の味覚との結びつきはなさそうである。

えに対する回答者数はう・おとあ・いのその中間位であるが、回答の質から見れば曖昧な得体の知れない味わいを含んでいる。

e. 触 覚 (皮膚感覚)

	あ	い	う	え	お
熱 い	38	13	5	10	10
暖(温) い	18	1	8	6	14
生ぬるい	2		7	4	1
やや冷い	1				
冷 い	7	71	13	23	7
堅 い	12	85 (28)	7	33	31 (10)
少し堅い				1	
柔 い	89 (30)	17	71 (24)	30	47 (16)
滑 か	3	3	7	4	4
鈍 い			2		
ぴりっとする		2			
痛 い		6	1	1	
刺 す		4			
鋭 い	1	2		1	
その他	5	5	6	5	3
計	176	209	127	118	117

〔被験者 299 名〕

あは先ず「柔い」次に「幾分暖い」音と言えようか。「熱い」の38名は 語音の吸引力を多少割引きせねばなるまい。

いは「堅い」「冷い」音で、他に「痛い」とか「刺す」といった刺戟的な評語が注意をひく。

うは71名(24%)の多数で、「柔い」音と言えよう。

えは相反する評語が伯仲していて、特性が掴めない。

おは「柔い」が47名(16%)であり、その反対の「堅い」が31名(10%)で、前者に幾分の歩があるけれども、一方に片づけるわけに行かない。また7名対25名の差からすれば、「冷い」というよりは「温い」方であろうか。えよりはかなりはっきりした数値が現われているように思う。

f. 運動・速度

	あ	い	う	え	お		
す 早い	1 } 44 } 45 (15)	2	5	39	10		
大股で早い		150 } 157 (52)					
直線的に早い						2	
切ったように走る						1	
速 い						1	
速くて鋭角的						1	
速いが鈍角的						1 } 42 (14)	
やや速い							2
ちょこちょこ動く	4	14(5)	7	12(4)	1		
小 刻 み				1			
う ね る	9	3	38(13)	8	18(6)		
やや遅い	1	12(4)	102	26 } 28 (9)	1		
遅 い	58				5 } 112 (37)	6	
ゆっくりした	13 } 77 (26)						
の ろ い	4						
極めて遅い	1						
匍 う							1 } 125 (42)
ゆっくりと強く							
鈍 い							
そ の 他	8	3		10	6		
計	143	189	162	101	156		

〔被験者 299名〕

運動と速度は感じとしては実際には区別することが難しい。運動は必ず速度を伴い、速度は運動するものにしかな見られない現象だからである。これらは単なる感覚ではなく、主として視覚、時には聴覚や触覚を通して知覚されるものである。

あは「遅い」方の音という者が77名(26%)で、「速い」方に属せしめる者が45名(15%)であるから、「遅い」方が優勢である。

いは157名(52%)の絶対的な数をもって「速い」音と言える。

うはそれと逆に112名(37%)で、「遅い」というのが決定的。また「うねる」の38名

(13%) は割引してみても無視できない。

えには回答者が少く、「速い」方が幾分多い。

おはう以上に遅い感じの音で、「うねる」と言った者はうの場合より少く18名(6%)である。この点でもおは音感上最右翼にあると言える。

g. 距離 (奥行知覚)

	あ	い	う	え	お
近い	50 (17)	89 (30)	40 (13)	51	41 (14)
少し近い				1 } 52 17	
中	11	6	8	12	5
少し遠い				1 } 21 } 22 7	2 } 99 } 101 34
遠い	56 (19)	34 (11)	57 (19)	21 (7)	99 (34)
計	117	129	105	86	147

[被験者 299名]

距離とは奥行知覚の意味で用いた。これも主として視覚を通じて感知されるが、聴覚または触覚が参加することもある。

おは「遠」「近」伯仲。「こちら」「こなた」に対して「あちら」「あなた」等の遠称と呼ばれる語が存在するに拘らず、勢力相半ばしたのは不思議である。

いは「近い」方が遙に多い。うは「速い」方がいくらか多いが、おにあっては「速い」方がずっと引き離している。えは「近い」方が優勢で、いへの接近を示している。

h. (位置の) 高低

	あ	い	う	え	お
極めて高い		1 } 97 } 98 33			
高い	72 } 2 } 74 25		15 } 1 } 16 5	31 } 4 } 35 12	17 } 1 } 18 6
少し高い					
中	10	4	12	13	7
少し低い	2 } 37 } 39 13				
低い		23 } 2 } 25 8	105 (35)	44 (15)	127 } 2 } 129 43
下					
計	123	127	133	92	154

[被験者 299名]

空間的な高低は主として視覚を通じる知覚で、距離の場合と同じく回答者数が少ない。

あは「高い」方が優位。「あがる」「あおぐ」「あたま」等への連想が引っぱっているのかも知れない。「低い」方も39名(13%)だから見逃せない。

いは「高い」の賛成者があの場合よりも多く、また「低い」と言う者がより少く、「極めて高い」と言う者が1名でもあるところ、注目に値する。

うは「高い」方が16名(5%)に対し、「低い」が105名(35%)だから後者が遙に優勢。おの高低差はさらに著しく、37%の違いをもって「低い」音と言える。

えはこの点でもぬえ的な性格を示している。

i. 形態

	あ	い	う	え	お
大きい	33	1	4	5	32
太い	42		49	11	100
ふっくらした	2				
小さい	2	22	10	14	2
細い	4	73	6	29	1
細長い		6			
長い	9	12	10	17	8
短い	6	21	17	21	10
円い	72	3	51	5	55
(円い類)	3	1	2	1	1
平い	2	110	2	20	
尖った	8	4	3	19	7
広い	8		1	3	4
狭い		1	1	1	
その他	2	4	3	9	4
計	193	258	159	155	224

[被験者 299名]

形態は主として視覚、時には触覚に基く知覚である。

あは「太くて円い」感じだと言って差支えなからう。

いの音は「尖った」「細い」または「小さい」形を暗示する。

うは幾分あに近いが、あほどに特性を示さない。「大きい」または「太い」と称した者が合せて53名(18%)いるのに対して「小さい」または「細い」が計16名(5%)いる。

おは 132 名 (44%) から「大きい」という語音の吸引力をいくらか割引しても「太い」または「大きい」ということが出来、「幾分円い」とも評せられよう。

えは「太い」方の 16 名 (5%) に対し、「細い」「小さい」という方の 43 名 (14%) が出た。「長い」「短い」や「平い」「尖った」という相反する知覚においても曖昧な回答になっている。

j. 抽 象

	あ	い	う	え	お
ゆるい	62	8	97	19	50
(ゆるいの類)	2 } 64 } 60 (20)	2 } 99 } 97 (32)	2 } 23 } 6	1 } 51 } 41 (14)	
厳しい	4	53	2	17	10
(厳しいの類)	5 } 58 } 50 (17)				
鈍い	25	4	93	14	72
鋭い	19	145 } 141 (47)	3 } 90 (30)	28 } 14 (5)	10 } 62 (21)
軽い	1		2	2	1
重い	1		2		5 } 9 } 8 (3)
(重い類)					4 } 8 (3)
(陽気の類)	1	3			
(陰気の類)			2	1	
その他	7	2	2	4	3
計	122	220	205	89	156

〔被験者 299 名〕

抽象では感覚を離れた内部的な感じや情緒を求めたいと思ったが、期待した回答が得られなかった。調査結果によれば、

あは「ゆるい」、どちらかと言えば「鈍い」感じの音と言えよう。

いは「厳しく」「鋭い」とはっきり銘打てる。

うは決定的に「ゆるく」「鈍い」音。

えは「いくらか鋭い」。

おはうほどではないが、「鈍く」「幾分ゆるい」音と言えるであろう。

以上で統計の結果を一通り見渡し、私なりの解釈を施した。なるべく記述的に取扱おうと心掛けたが、こういうものの解釈にはいくぶんの主観性は免れないところであろう。

英語の母音に関しては、別章で音声学・音素論・音響物理学・言語心理学・英語学等における所説を総合して、聴覚的には clear-dull; 視覚的には light-darkness の系列に大母音を並べること、それは前母音・後母音に大きく二分されて前者が clear で後者が dull な音感であること、また音量 (sonority) の面から母音を対比して見ることに意義があることを説き、いくつかの言語現象やスタイル上の問題に音感の側からの説明を試みた。ここでは以上の資料を中心として日本語の五母音の音感を大ざっぱに纏めてみよう。

英語の短音・長音・二重母音を合せて 20 個以上に弁別される母音に対して、日本語の母音は 5 個、長音を別個に数えても総計 10 個にしかならない。その区劃は音声学のいわゆる基本 5 母音に近く、相互に極めて分明で、過去においても母音間の移動が英語のようにたやすく行われてはいない。各音の印象ははっきりしている。従ってこれを音感上の一つの系列に並べてみることは英語ほどには意味がなく、やや無理でもある。仮に澄濁線上に並べるとすれば、この統計の結果ではいーあーえーおーうの順序となり、その中い・あ・えは「澄」に、お・うは「濁」の部に属するようである。また明暗線上に並べれば、いーあーえーうーおとなり、前項同様のい・あ・えが明の方、う・おが暗の方に分けられようが、おとうの順序が澄濁と明暗の場合逆になっている。調音点における上顎と舌の開きからはいーえーあの順序になるのが、この二つの音感ではいーあーえになるのはおかし。この三つは音感の点で単純な関係にないように思われる。

まず一番前方で、調音点が最も高い位置において発せられるいについて見ると、この音が音感性最強であることは動かない事実である。それは各調査項目に亘って回答者数が最も多いことからしても分る。聴覚的には「高い」「澄んだ」音で、「極めて明く」、色彩でいえば「黄色」の与える感じがこれに近く、「堅い」「冷い」あるいは「刺す」ような音と形容できる。また速度からいうと「速い」感じ、空間的には「高く」「近い」。形態の上では「尖った」「細い」あるいは「小さい」ものを連想させ、抽象的には「厳しい」「鋭い」ものを思わせる。一口で言えば、「きわだった」感じとでも言おうか。この結論は英語の [i] 音について私が各種の材料から帰納した音感とほとんど一致するものである。英語では長音 [i:] がこれらの特性のいくつかをさらによく強調する部面がある。ちっちゃい、ちょっぴり、ちび; ちくり; びりり、ちりんちりん; きびきびと、きびしい等の擬声語・擬態語の語音を味わえばこのことが容易く理解できよう。

えは前母音で半閉、いくらか後方に調音点を有する。いくぶんいに近い性質が伺われないことはないが、この統計では各項目に亘り、母音中回答者が最も少く、しかも散票であるところから、音感的に特色づけることが甚だ難しい。音感語としては掛け声とか、発語時または

言葉の切れ目に用いる繋ぎとしてのえーぐらいである。面白いことは、短歌のような調音を重視するものでは、えが不協和音の働きをしているようで、筆者の観察では31音中え（行音）が3個までは許せるが、4個以上になると耳障りになる。藤村の‘わきて流るるやほしほの’という柔くて快い調をもった詩は7・5調12行中にえ（行音）をわずか4個しか含んでいない。これはえ音の頻度が普通の散文や会話文に比して著しく少い。散文でも俳句や民謡になるとえ音の使用率は高くなる。

あはこの統計の結果から見れば、い・えと共に前母音の性格を有する。（英語の短音〔æ〕は前母音、長音〔ɑ：〕は後母音で、その間にはかなりのギャップが見られる。）いと違った意味で「明るく」、色彩では「赤」、ついで「橙」と結びつく。開音という点でおに近く、「柔い」「太く円い」「ゆるい」音と特徴づけられている。上に言及した藤村の詩ではあ行音18個が、お行音23個と共に音量の豊かさをもって好まれているようである。叫びを現わす感歎詞に含まれるほか、他音との対比現象においてもその音感性を発揮する。

おは音感的には、たいていの項目に亘っていと反対側の最左翼にある。うよりも強い感じの音で、「暗く」、色彩は「黒」と結びつける者が多い。速度では「のろく」、空間的には「低く」、形態上では「太く」「大きい」ものを連想せしめる。こうした音感は一造語上かなりの影響を及ぼしたと思われるし、感歎詞にも適するが、あほどに絶叫的ではない。音量ではあと共に最大である。

うは以上の統計によれば、「低い」音で、「濁って」いて「薄暗く」、色彩的にはやや複雑で「灰色がかり」、「柔く」「のろく」また「鈍い」感じがするということになる。英語はclear-dullの音感系列では〔u:〕,〔u〕の方が〔ɔ:〕,〔ɔ〕よりもよく特性を現わす。clear-dullと澄・濁とは語感的に多少の差はあるにしても、ともかく澄・濁系列ではうがおよりも端に来ることは興味がある。

〔本稿は昭和30年日本英文学会第8回九州地方大会において口頭発表したもの、ここに整理して印刷に付する。〕